

自分の知を成長させよう 良い子が山ほどいる学校 学習指導だより
平成31年3月4日 第28号 馬頭中学校学習指導部
ただ今勉強中です
「ただ今勉強中」は「学校や家庭での毎日の学習を意識化・習慣化する目的」でネーミングしました

司馬遼太郎さんの随筆「21世紀を生きる君たちへ、十六の話」を紹介します



少し古いですが、次の文章は歴史小説家の司馬遼太郎さんが、21世紀を生きる君たちに思いを馳せて書いた文章の一部です。ここに書かれた言葉の一つ一つが、現学年を終える馬頭中学校の皆さんのこれからの指針となると思い、紹介します。

君たちは、いつの時代でもそうであったように、自己を確立せねばならない。自分に厳しく、相手には優しく。という自己を。そして、素直でかっこいい自己を。二十一世紀においては、特にそのことが重要である。二十一世紀にあたっては、科学と技術がもっと発達するだろう。科学・技術が、洪水のように人間をのみ込んでしまってはならない。川の水を正しく流すように、君たちのしっかりした自己が、科学と技術を支配し、よい方向に持って行って欲しいのである。右において、私は「自己」ということをしきりに言った。自己といっても、自己中心に陥ってはならない。人間は助け合って生きているのである。

(中略)

このため、助け合う、ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のもととは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることに言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。「いたわり」「他人の痛みを感じること」「やさしさ」みな似たような言葉である。この三つの言葉は、もともと一つの根から出ているのである。根と言っても、本能ではない。だから私たちは訓練をしてそれを身につけねばならないのである。その訓練とは、簡単なことである。例えば、友だちが転ぶ。ああ痛かった

ろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分の中で作りあげていきさえすればよい。この根っこの感情が、自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、二十一世紀は人類が仲よしで暮らせる時代になるのにちがいない。

鎌倉時代の武士たちは、「たのもしさ」ということを大切にしてきた。人間はいつの時代でもたのもしい人格を持たねばならない。人間というのは、男女とも、たのもしくない人格に魅力を感じないのである。もう一度繰り返そう。さきに私は自己を確立せよ、と言った。自分に厳しく、相手には優しく、とも言った。いたわりという言葉も使った。それらを訓練せよ、とも言った。それらを訓練することで、自己が確立されていくのである。そして、「たのもしい君たち」になっていくのである。以上のことは、いつの時代になっても、人間が生きていくうえで、欠かすことが出来ない心構えというものである。君たち。君たちはつねに晴れあがった空のように、高々とした心を持たねばならない。同時に、ずっしりとたくましい足どりで、大地をふみしめつつ歩かねばならない。私は、君たちの心の中の最も美しいものを見続けながら、以上のことを書いた。書き終わって、君たちの未来が、真夏の太陽のように輝いているように感じた。

(司馬遼太郎著「十六の話」より)

3年生の皆さんにとって、最も大切な時期がやってきました。これまで頑張ってきた成果が問われる受験日がすぐそこまで迫っています。「当日は大丈夫だろうか」、いろいろな感情があるでしょう。焦りすぎたり、イライラしたりでは、ストレスがたまるばかりです。抱えている不安はみんな一緒です。友だち同士、励まし合いながら、乗り越えましょう。



1、2年生もまもなく学年が1つ上がります。今年1年間、頑張ってきた自分をほめてあげましょう。どんな成長が見られましたか。そして良いところが更に伸ばせるよう振り返りをしてみましょう。